

情報提供者（？）南方熊楠：イギリス人研究者への協力について

田村義也（IRCP 客員研究員）

要旨：南方熊楠は、民俗学と文献研究による比較説話研究の領域では著作が多かった一方、生物研究においては、学術的な業績がきわめて少なく、研究者というより情報提供者（インフォーマント）というべきだと自然研究者たちから指摘されることがある。事実、生物学における南方熊楠のもっとも顕著な功績は、日本産変形菌標本をイギリスのリスター父娘に提供したことで、彼らを通じてそれが学界への貢献となった。ところで、これと類似の間接的な学界への貢献を南方は、ディキンズの日本文学翻訳・研究業績に対しても行っている。このことの背後には、生物学と文学研究とに共通する、研究誠意とその成果を業績とするについての南方の独自の姿勢が存在すると思われる。

キーワード：インフォーマント、リスター、ディキンズ、日本文学英语訳、変形菌

1. とらえがたい「研究者」

南方熊楠（1867-1941）は多角的な学者で、手を染めた研究領域は人文系と自然系にまたがり、文献研究において取り組んだ文献は地域では東洋と西洋、時代も古代から近代までに及んだ。漢文と、英仏語をはじめ多数の西欧言語の文献を読みあさり、英語と日本語の双方で、晩年まで論文執筆を続けた。英語での研究ノートの公刊は、英誌『ネイチャー *Nature*』と『ノーツ・アンド・クエリーズ *Notes and Queries*』を舞台に、26歳だった1893年から66歳の誕生日を控える1933年まで40年間に及び、前者には51本、後者には300本以上の投稿が掲載されている¹。これら英語による著作だけでも、決して寡作ではない南方は、しかしながら「研究者」としての評価が今日まで安定していない。

南方熊楠は、ふつうには民俗学者として知られている。それは、柳田國男との交流を通じて、柳田が1913年に創刊した民俗学雑誌『郷土研究』の主要寄稿者となったことや、南方が出版した単行本に、民俗学関係の論考が多く掲載されていたことなどによるかも知れない。

しかし、南方が日英の研究誌で発表していた論考は、狭義の民俗学というより、比較説話学（民間伝承・口承文芸に基づく民衆の文学の国際的比較研究）の領域のものが多かった。『今昔物語集』中の各説話を、中国の漢文文献や、漢訳仏典中に含まれるインドの説話と比較し、その起源や類似関係を探求する論考を『郷土研究』誌に続々と発表（「今昔物語の研究」1913-1914年）したのは、その一例である。「紀州俗伝」の通し題名のもとに、紀南田辺町での口承伝承や民間知の聞き書きといった民俗的報告を『郷土研究』誌に投稿したのと並行して、南方は多文化間の説話を比較する文献研究

¹ 『南方熊楠英文論考 [ネイチャー] 誌篇』（2005年）『南方熊楠英文論考 [ネイチャー] 誌篇』（2014年）で、本稿筆者も加わった研究者グループにより全訳と解題を公刊した。

を精力的に進めていた。日本語での論文で、この分野でもっとも早いもののひとつ「西暦九世紀の支那書に載せたるシンダレラ物語」(1911年)は、いじめられた継子が最後には幸せになるというヨーロッパのシンデレラ物語と骨子や細部(魔法を使う動物の助けなど)が似ている説話が、東洋のはるかに早い時期の文献(『酉陽雜俎』段成式撰、860年頃成立)に記録されている例を報告したものであった。時代と地域を隔てて類似の説話が存在していることのおもしろさを、論文の題名にはっきりとうたったところに、熊楠の関心のあり方がよく現れている。そして、この分野の研究を、熊楠は1895年の「さまよえるユダヤ人」(第一報は *Nature*, 1895.11.28, 第二報は *Notes and Queries*, 1899. 8.12) や1899年の英文論考「かしこい子供 A Witty Boy」(*Notes and Queries*, 1899. 6. 3) 以来、イギリスの研究誌で発表し続けていた。「かしこい子供」は、ルネサンス期イタリアの小説家サッケッティ(Franco Sacchetti, c.1330 - 1400)の小咄集 *Trecento Novelle* (1395、現在では、杉浦明平訳『ルネサンス巷談集』として邦訳がある)と、中国古代の『世説新語』(劉義慶撰、5世紀)にみえる孔融(208年没、儒者、孔子20世の子孫)の幼少期の逸話が、同工異曲の落とし咄であることを紹介した短文であった²。

附言すれば、そういった研究を本格化させる前の彼が、滞英時代に取り組んでいたのは、比較科学的関心の文献研究であった。第一論文「東洋の星座 Constellations of the Far East」は、古代インドと古代中国の天文学の類似性を検討したものであり、科学研究を歴史的にさかのぼることにより、西洋近代科学を文明史全体の中で相対化するという意図が、イギリスで著述の公刊を始めた頃の南方にははっきりと存在した³。著述者としての南方にとって民俗研究は、中心でもなければ最初の領域でもなかったのである。

くわえて、南方熊楠が研究生活の中でいちばん長い時間を費やしたのは、それらの民俗学や比較説話よりむしろ、生物学の領域だった。南方は、1887年に渡米し、アメリカ各地(サンフランシスコ、ミシガン州ランシング、アナーバー、フロリダ州ジャクソンヴィル)に5年、1892年から8年間はロンドンと、20代のすべてと30代前半を英米で過ごしたのだが、1890年前後のアメリカ時代には、さかんに植物(初期には高等植物、やがてキノコ類、藻類、変形菌類など)の採集を行っており、その標本が南方邸資料として現存している。ロンドン時代には野外採集をほとんど行っていないが、帰国後の1901年から3年間、紀伊半島南部の那智山で過ごした間には、隠花植物を主たる目標として、膨大な採集を行い、また生涯続けることとなった「菌(キノコ)類図譜」の作成をはじめている。彼が最終的に残した生物研究資料は、高等植物標本が約7000点、また変形菌(真性粘菌)の南方熊楠コレクションは6000点におよび、またキノコについては、4700を超える数の観察図と標本が「菌

² 拙稿「古イタリア説話との出会い-南方熊楠の『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌第一投稿をめぐって」(『ユリイカ』2008年1月号)で、この論考を手がかりにイギリスにおける南方の比較説話研究の試みの内幕を検討した。

³ 「小生はそのころ、たびたび『ネーチャール』に投書致し、東洋にも(西洋一汎の思うところに反して、近古までは欧州に恥じざる科学が、今日より見れば幼稚未熟ながらも)ありたることを西人に知らしむることに勸[つと]めたり。」(南方熊楠の1925年1月30日付吹欠義夫宛書簡、いわゆる「履歴書」、『全集』7巻16頁)

類図譜」として作成された⁴。特に菌類図譜は、その多くが採集日、採集地の記録を伴った、学術的に有用なもので、変形菌標本の南方コレクションとともに、現在は国立科学博物館が所蔵し、研究者の利用に供されている。

こうした熊楠の生物研究は、成果として発表された論文が少なく、ながらく、熊楠の知られざる研究活動だった⁵。しかし、平成初年以來、和歌山県田辺市の南方熊楠旧邸に保存されていた蔵書・資料の調査が進行した結果、少なくとも1900年の帰国後の南方が、いちばん長い時間を費やしていたのが生物研究だったことは、上述のように次第に明らかになってきている。

こうした、労力の方向性の多岐さないし分裂した状況は、南方熊楠が研究者としてなにを志ざし、なにを成し遂げたのか、今日までよく理解されずにいることの理由の一端であろう。

2. 南方熊楠の自然科学「業績」

2017年12月、国立科学博物館において、11年ぶりの「南方熊楠」展が行われた。本稿筆者も企画委員として参加したこの企画展は、「100年早かった知の人」という題名が立てられ、その英語題名としてわたしたちは、An informant-savant a hundred years ahead of his time という表現を用いることにした。日本語題名として「知の人」という必ずしも意味明瞭でない表現をし、それに対応する英語題名のために、informant-savant という言い回しを「铸造」することになった背景にあったのは、とくに国立科学博物館という自然科学の拠点研究機関において南方熊楠展を行うにあたって、彼を「研究者」と呼ぶことが出来るか、という問題意識だった。

南方熊楠は、学術的著作をなした「学者」としては、十分に多産な執筆者であって、記述の通り彼の全集は12冊、1冊あたり600ページを越える量の著述を残している⁶。しかしそのうち、学術系雑誌に発表された公刊論文は、比較説話学や（広義の）民俗学といった人文系研究の領域に集中しており、彼がもっとも時間を費やした生物研究の分野では、公刊された著述はきわめて少ない。試みに彼の著作目録から、狭義の生物学の分野での公刊論文を抜き出してみると、下記でほぼすべてである。

・英語論考

「ピトフォラの分布 Distribution of Pithophora」 *Nature*, 1903. 4.23

「カロストマの分布 Distoribution of Calostoma」 *Nature*, 1903. 7.30

「魚類に生える藻類 An Alga growing on Fish」 *Nature*, 1908. 11.26

「粘菌の変形体の色 Colours of Prasmodia of some Mycetozoa」 *Nature*, 1910. 6.23; 1912.10.24

・日本語論考

「本邦産粘菌類目録」『植物学雑誌』1908.9; 1913.9; 1915.9

⁴ 数字は、『南方熊楠大事典』（2012年）の「高等植物」「菌類」「変形菌」各項目に拠る。

⁵ 拙稿『南方熊楠とアジア』（「アジア遊学」144、2011年）序文で、南方の没後、その研究活動が漸進的に紹介されてきた経緯を素描した。

⁶ ほかに、私信書簡を中心に、現行全集を凌駕する量の未刊著作が存在する。

「現今本邦に産すと知れた粘菌種の目録」『植物学雑誌』1927.2

これらのうち、英語で発表されたものはみな、断片的な観察ノートである。日本語のものは、それと大きく性格が異なり、粘菌（変形菌）という分類群のなかで、日本という地域で存在が確認された種を網羅した目録である。これらは、自身と協力者を含めた「チーム・南方」の活動を総括する性質のものだが、研究論文としてはかなり特殊な内容のものといえよう。そして、これですべてであってみれば、自然科学に話を限った場合、南方熊楠はきわめて寡作だったことを、認めないわけにはいかない。

このことから、南方熊楠を（すくなくとも、自然科学の）「研究者」とは呼びがたい、というのが、2017年科博南方熊楠展を準備する過程における、自然科学系の研究者らからの指摘であった。

ここには、ふしぎな矛盾がある。先に述べたような、南方の残した研究資料が与える印象では、南方熊楠は生物研究にいちばん力を注いだ、生物学者だったのである。にもかかわらず、彼の公刊著作のなかでは、現実には、生物関係のものはきわめて少ない（したがって、一般には生物学者として認知されてはこなかった）。南方熊楠は、日々の研究活動の成果を、すべて業績として発表出来たわけではなかったのである。

20世紀に入ってから確立された学術研究の尺度で南方の知的活動を「評価」することには慎重さが必要だが、客観的事実として、生物学界へ向けて南方熊楠が、自分の名前で（自身が責任を負う形で）貢献をしたことはきわめて少なかった。決して少なくない量の観察・採集を行いながら、貢献するところの少なかった南方の「研究」は、それでは既存の学界とどのような関係があったかという問いかけに対する仮説のひとつが、「インフォーマント」、すなわち、研究者たちに学術情報を提供し、研究の成立を支援する情報提供者だった、という見方である。

3. 「インフォーマント」南方熊楠：生物学者として

南方熊楠は生涯在野の立場にあり、その研究は、学界から孤立していたと言われることが多かった。そしてとくに自然科学の領域では、彼の「著作」はきわめて少ない。しかし、その研究が世界の生物学研究と無縁に行われていたわけではなく、彼の観察・採集に基づく研究業績は存在している。前出の、帰国後の *Nature* 誌への投稿は、淡水藻（「ピトフォラの分布」、「魚類に生える藻類」）および菌類（「カロストマの分布」）の日本での観察を報告したものであり、そのほかにも大英博物館や個々の研究者へ、自分の採集と観察を送る努力を、南方は日本から連綿とおこなった⁷。

そのように自分の研究を学界に提供しようとした努力がとくに顕著なのが、変形菌（真性粘菌）の領域であった。

⁷ 特に淡水藻については、イギリスの研究者ウェスト（George Stephen West, 1876-1919）と通信し、自分の採集を提供しようとしていたが、ウェストの早世により結実をみななかった。参照：松居竜五「勝浦・那智における南方熊楠」（『生活文化研究所年報』第16輯 ノートルダム清心女子大学生活文化研究所 2003年）。

南方は、1900年までの在英中に大英博物館（BM）に出入りし、その研究者たちと交流を持った（館員として勤務したと過去に言われたのは、事実ではない）。1898年に口論沙汰を起こして図書閲覧室を出入り禁止となるまでは、C.H. リードや R.K. ダグラスら大英博物館の東洋研究者たちと交流し、その後も、サウス・ケンジントンの大英博物館（自然史）⁸の生物学者たちと親しくしていた。その縁で、帰国後の南方は、日本で採集した藻類および菌（キノコ）類の標本をイギリスの研究者へ送るようになる（前出の『ネイチャー』誌論考のうち、1903年の2編は、そうした通信の結果である）。そして、1905年暮れに彼は、変形菌という分類群の日本産標本を大英博物館へ送り始める。

当時大英博物館で変形菌標本コレクションの管理をしていたのは、正規の館員ではない（定員外の）アマチュア研究者だったアーサー・リスター（Arthur Lister 1830-1908）と、グリエルマ・リスター（Gulielma Lister 1860-1949）の父娘だった。アーサーは、大英博物館（自然史）変形菌コレクションに基づいて、時代の標準となる変形菌図鑑 *A Monograph of Mycetozoa*（初版 1894年）と、変形菌紹介の小冊子 *Guide to the British Mycetozoa Exhibited in the Department of Botany, British Museum (Natural History)*（初版 1895年）を編纂刊行していた。娘グリエルマは、研究ノート管理及び観察図の描画を担当する助手の仕事を、早くからしており、父アーサーの死後には後者の改訂版を二度刊行することになる（1911年、1925年）。

大英博物館変形菌標本コレクションの（事実上の）管理担当研究者として、リスター父娘は、世界中の変形菌研究者と通信し、標本を受け取る立場にいた。南方熊楠は、おそらく彼らを個人的には知らないまま、大英博物館へ宛てて日本産の変形菌標本を送り始めた。それは、自ら日本へ赴いて採集することが難しいリスター父娘にとってはきわめて重要な情報供与で、南方からの標本を受け取ったアーサーは1907年2月23日に、南方に対して熱烈的な感謝の意を表し、標本の価値を称える返信を記した。それ以降、1908年まではアーサーへ、その死後はグリエルマへと南方は日本産変形菌標本を送り続ける⁹。

南方から送られた標本は、リスター父娘によって業績化されていった。まず 'Mycetozoa from Japan' (*The Journal of Botany*, 1906. 7) が、南方の標本に基づいて公開された。また南方からの標本の中に学界未知種が含まれており、*Arcyria glauca*（アオウツボホコリ）という新種名を命名することが、南方宛の私信でアーサーから告げられた（1907年3月19日付）。ただし、これを論文にまとめる前にアーサーは亡くなり（1908年7月19日）、新種としての記載報告は、グリエルマによって改訂された *A Monograph of Mycetozoa* の第2版（1911年）でなされることとなる。この後も、グリエルマは、アーサーの後を引き継いで大英博物館の変形菌コレクション管理者の役割を（いわば令外官として）担い続け、南方を含めた世界中の採集者から送られた標本に基づいて、新種の発表を

⁸ 南方在英当時の呼称は British Museum (Natural History)。1881年に新築され、1963年までBMの分館という位置づけだった。現在の自然史博物館 The Natural History Museum という呼称は1989年から。

⁹ 山本幸憲編『南方熊楠・リスター往復書簡』（1994年）に、両者の間の通信がまとめられている。とくにグリエルマ・リスターは、南方からの標本のすべてについて詳細なコメントの返信をした。

活発に続けた¹⁰。南方の送付した日本産標本への言及は、1911年の第2版でも多数にのぼり、序文でも(他の世界各地の協力者とともに)その名が明記されて、とくに送付標本数の多さが特記された¹¹。1925年の第3版でも、序文で南方の名が挙げられ、すでに20年近くに及んでいたその貢献への謝辞が記された¹²。

こうした南方熊楠の日本での変形菌観察・採集活動は、大英博物館の変形菌研究者(正規館員ではないが)によって活用されることで、世界の生物学界が共有する知識となっていったのである。そしてそれは、過去にプラントハンターと呼ばれた生物採集者たちや、20世紀の人類学においてインフォーマントと呼ばれたひとびとの営みと同じ性質のものだったといえる。生物研究における南方の営為は、ほかの「研究者」との通信を通じて学界に貢献するという間接的なものだった。

4. 「インフォーマント」南方熊楠とディキンズの日本文学翻訳

このように南方熊楠は、自然研究(生物学)において、多年にわたる採集者でありながら、自分の業績として研究を公表したことはきわめて少なく、その活動は、学界との関係では研究者(リサーチャー)というより情報提供者(インフォーマント)という表現にふさわしいものだった。このことは、自分の名前で公刊した論述が英語・日本語とも多い人文科学・文献研究の分野とは、事情が相当に異なっていて、そのことが後世のわれわれにとって、一貫性のある南方熊楠像を構築することを妨げる大きな要因となっている。

ところが、—混乱を助長するようだが—、日本文学研究の領域においてもやはり、南方が「インフォーマント」としてイギリス人研究者の業績に貢献した事例が存在している。それは、フレデリック・ディキンズ(Frederick Victor Dickins, 1838-1915)の日本文学翻訳への協力である。

ディキンズは、アーネスト・サトウ、チェンバレン、アストンらとならんで、第一世代アングロサクソン系日本研究者の一人として、特に日本文学の翻訳紹介で大きな仕事をした人物である(にもかかわらず、後世の知名度の点では、彼ら三人に比べて不釣り合いに低いものになっている)。

ディキンズは、イギリス海軍軍医として1864年から1866年まで、その後弁護士として1871年から1879年まで日本に滞在し(後者の間の1872年には、マリア・ルース号事件でペルー側弁護人を務めた)、その間に知遇を得た駐日英国公使ハリー・パークスの伝記(後半生にあたる日本時代編を

¹⁰ ただし南方は、グリエルマの積極的な新種認定に批判的になっていく。両者の分類学的立場の乖離については、拙稿「新種ぎらいの分類学—南方熊楠の変形菌研究」(『熊楠研究』6号、2004年)で論じた。

¹¹ '[...] our knowledge of those [=Mycetozoa] of Japan has been much increased by the unwearied labours and graphic correspondence of Mr. K. Minakata, from whom we have received nearly three hundred specimens.' *A Monograph of Mycetozoa*, 2nd ed, 1911, p. 3.

¹² 1925年の第3版には、(初版および)第2版の序文も再掲された。これらの謝辞は、ちょうどこの時期に変形菌への取り組みをはじめていた、皇太子時代の昭和天皇の眼にふれたものと思われる。翌1926年、南方等は宮中生物学御研究所からの打診を承けて、日本産変形菌標本の調製献上を行うこととなり、また1929年の昭和天皇和歌山行幸に際しては、無位無冠の民間人南方熊楠が特に指名されて、「紀州田辺湾の生物」について御進講を行った。

分担、1894年）も執筆している。

彼の日本文学翻訳は、*Hyakunin Isshu*（『百人一首』雑誌初出 1865年¹³、単行本 1866年）を皮切りに、

Chushingura, or The Royal League. a Japanese romance（『仮名手本忠臣蔵』、1875年）

The Bamboo-Hewer's Story or The Tale of Taketori（『竹取物語』、1875年）

Fugaku Hiyaku-kei, Or, A Hundred Views of Fuji (Fusiyama)（『富嶽百景』、1880年）

Hojoki: Notes from a Ten Feet Square Hut（『方丈記』1905年初出；1907年単行本）

The story of a Hida craftsman (Hida no takumi monogatari)（石川雅望『飛騨匠物語』、1912年）

など、最晩年まで続けられた（堂上の文学よりも、江戸時代の民衆に愛好された庶民文芸への傾向がみとれることは、興味深い）。そのうち、南方熊楠との関係では、雑誌初出の際には南方との共訳として発表された「方丈記」英訳（*Journal of the Royal Asiatic Society*, 1905）が突出して著名だが、この翻訳は1907年に単行本（出版者は Gowans and Grey, Glasgow）となった際には、共訳者南方熊楠の名前が消えて、ディキンズ単独の仕事として刊行された。

このことについて南方は、後年の私信（矢吹義夫宛て 1925年1月31日付け書簡、いわゆる「履歴書」）のなかで、その不当をそしめる記述をしており¹⁴、彼は対等な共訳者という意識でいたことが明らかである。

しかし、この「方丈記」英訳を、ディキンズの日本文学翻訳の業績全体のなかに置いてみると、南方のそうした認識とはやや異なったディキンズの側の思惑が見えてくるように思われる。すなわち、彼らの「方丈記」英訳がはじめ「共訳」として雑誌発表された1905年と、単行本となった1907年の間の1906年に、ディキンズの主要業績とよび『古代中世日本文学』（*Primitive and Mediaeval Japanese Texts*, Oxford University Press, 1906）が刊行されているのである。

この書は、英語訳の巻と、ローマ字表記による日本語原文の巻の二巻構成による、二言語版日本文学選文集で、まがりなりにも日本文学の輪郭を原文によって示した、この分野の嚆矢である。「万葉集」や「古事記」といった上代文学にみえる長歌、散文文学としてはアジア系言語で最古と目されていた「竹取物語」、和歌の本質を古代の日本人自身が論じた「古今集」仮名序、そして舞台芸術である能の「高砂」と、さまざまな形式の文学作品から芸術論にまでわたって、日本文学の多様さを示す作品が選ばれた。附録として、日本語文法略説や、枕詞目録などの語彙解説も附されるなど、日本文学

¹³ *The Chinese and Japanese Repository of Facts and Events in Science, History, and Art, Relating to Eastern Asia*, vol III, nos XX (March)– XXVIII (November), 1865に、9回分載で発表された。参照：N.J. Teele, 'F.V. Dickins and the Hyakunin Isshu'（『同志社女子大学総合文化研究所紀要』24巻、2007年）。

¹⁴ 「しかるに英人の根性太き、後年グラスゴウのゴワン会社の万国名著文庫にこの『方丈記』を収め出版するに及び、誰がしたものか、ジキンスの名のみを存し小生の名を削れり。」（全集7巻19ページ）。この記述は、自分の名前が消えたことを、ディキンズ自身の意図と考えてはいないようにも読める。

研究のてびきたらんとした意欲的な構成の、研究的な性質のものであった¹⁵。ディキンズと南方が知り合ったのは1896年のことだが（南方の『ネイチャー』誌論考を眼にしたディキンズから通信をはじめた）、1900年にロンドンを去るまでの間に両者は、ディキンズの日本文学英訳について議論をするなど、かなり親しく、また学問的に信頼し合う関係となっていた¹⁶。この企画は、ディキンズにとって、20代だった1865年の『百人一首』以来30年以上続けてきた日本文学翻訳事業の集大成となったもので、その構想に際して、協力者としての南方の存在は、ディキンズの念頭に当然あったはずである。1903年4月7日付の南方宛て書簡¹⁷でディキンズは、日本文学の仕事を「再開」したい意志を述べ、上記のような収録作品の構想を示したうえで（仏教的無常観を主題とした「方丈記」も、この時点では名前が挙がっていた）、「宇津保物語」の英語訳提供の打診と、「万葉集」研究のための文献などさまざまな依頼を記している。南方がこれに応じて、「万葉集」の注釈書『万葉集古義』（鹿持雅澄）などの研究文献を探索した経緯は、彼の日記および土宜法龍宛て書簡などのこの時期のさまざまな文章から窺うことが出来る。ディキンズのこの仕事に対する南方の貢献は、大きかった。

そうした南方の協力に対してディキンズは、刊行された図書の序文末尾の謝辞欄において、‘to my friend, Mr. Minakata Kumaugsu’ という表現で謝意を明記した¹⁸。日本で入手するしかない文献を捜索・購入する現地在住者としても、また日本語を母語とする人間から、文学作品の微妙な意味や味わいの説明を英語で提供するといった面でも、彼はディキンズに対する「インフォーマント」すなわち情報提供者だったのである。そしてその意味で、ディキンズの日本研究に対する南方の立場は、変形菌研究におけるリスター父娘への貢献と並行する（そして先行する）ものだった。

5. くいちがう思い：研究者と情報提供者のあいだ

ところで、南方より30年ちかく年長だったディキンズの側では、自身も英語で研究ノートを学術誌に投稿している南方に対し、学術的な信頼は持っていたとしても、対人関係のうえで自分と対等な存在と考へてはいなかったと思われる。両者が知り合った1896年3月に、南方は28歳、ディキンズは57歳であり、その時点で南方は、『ネイチャー』誌に投稿するようになってまだ3年めだった。南方の1898年7月18日付けの日記には、ディキンズに対し金銭の借用をしていたのをディキンズの側か

¹⁵ 1866年に最初の単行本として刊行した百人一首の英訳が、すでに二言語（バイリンガル）の本文および語彙解説付きという、後身の学習者を意識したものだった。ディキンズのこうした日本研究入門的な図書の公刊は、サトウやチェンバレンらの業績に先行する。

¹⁶ 在英中、ディキンズの英訳「竹取物語」において、かぐや姫が訪問者を「順番に（in their turns）」応対したという表現をしていたことについて、南方が不品行な誤解を呼ぶものと批判し、その際の南方の態度を侮辱的と受け取ったディキンズとの関係が緊張したが、結局これを機に極めて緊密な仲になった、と柳田国男宛の後年の書簡で南方が述べている（1911年10月17日付）。参照：松居童五「ディキンズ」（『南方熊楠を知る事典』1993年）。

¹⁷ 岩上はる子・コーニッキ編『F.V.ディキンズ書簡英文翻刻・邦訳集 アーネスト・サトウ、南方熊楠（他）宛』（2011年）に、原文および日本語訳を収録。

¹⁸ 同書序文 p.viii。謝辞の対象の第一はアーネスト・サトウ。他にチェンバレンやカール・フローレンツら、初期の日本文学紹介者の業績が列挙されている。

ら借用書を破棄し、さらに追加の借り受けをしたという出来事が記されているが¹⁹、これはディキンズが南方との間柄を、いわば落差のある関係と考えていたことの端的なあらわれであろう。—後年の回想でディキンズのことを「梟雄の資あつてきわめて剛強の人なり」²⁰と述べた南方は、このことを好意的にディキンズの度量の大きさとのみ考えていたかも知れないが（帰国後もディキンズからは、図書を中心に南方への贈与は多数にのぼった）。

そのディキンズが、1903年来日本文学選文集の企画に取り組み、日本に帰国した南方と通信をしつつ、1906年に刊行に至る過程で、両者の「方丈記」英訳公刊がなされた。これは、前述の1903年4月7日付書簡でディキンズが収録作品の構想を示したなかでは、「宇津保物語」とともに含められており、後者について南方に英語訳の提供を打診した（ディキンズは「入れたいところですが、時間がたりないでしょう」と述べている²¹）のに対し、南方が前者の全訳を行ってディキンズへ送ったのははじまりである。南方はディキンズの書簡を5月27日に受け取ったのち、6月13日から翻訳にかかり、7月4日には本文を訳了して、7月18日にディキンズへ発送している²²。ディキンズの当初の思惑では、仏教的無常観を主題とした、日本の随筆文学の代表である「方丈記」も『古代中世日本文学』選文集に収めようとしていたのだが、翻訳を終えたあとのディキンズは、南方に対して11月5日付書簡の時点で、英国王立アジア協会紀要 *Journal of the Royal Asiatic Society* 誌上での発表を示唆しており、結局それは1年半後の1905年4月に実現した。この「方丈記」英訳は、いわば、選文集から離脱して、単発で先行発表されることになったのである。

このとき、両者の連名（それも、南方の名前を先にしている）としたことは、南方訳を受け取り、これを基に公刊訳をまとめたディキンズとしては、当然のことだったともいえる。しかしその際にも、ディキンズは英語を全面的に改訂し²³、序文において「翻訳は南方熊楠によるものを基に、私が全面

¹⁹ 「午後、デキンスを訪、十七磅（ポンド）借用の証文破らる。其上一磅借る。」この記述は、松居竜五「ディキンズ」（『南方熊楠を知る事典』1993年）が最初に指摘したが、このとき松居はこの件を「自分と熊楠はこれ以後盟友であり、金銭を超えた関係を持つということを宣言するため」の行動であり、両者は「歳の差を越えて無二の親友」となったと説明した。のち、松居「南方熊楠と『方丈記』」（『文学』2012年3・4月号）では同じ件について「お互いの大人げないやりとりに対する手打を意味するとともに、日本文学翻訳のための補助作業を、引き続き自分のために提供してくれることを熊楠に望んだ見返り」という解釈を示しており、本稿筆者もこちらに同意したい。

²⁰ 前出「履歴書」、全集7巻16ページ。

²¹ 日本語訳は、前出の岩上はる子・コーニッキ編『F.V.ディキンズ書簡英文翻刻・邦訳集 アーネスト・サトウ、南方熊楠（他）宛』による。

²² ディキンズからの書簡と南方の日記に基づく、この翻訳の成立から発表までの経過の整理は、前出の松居「南方熊楠と『方丈記』」（『文学』2012年3・4月号）がしている。このとき、「ディキンズから特に要請を受けたわけでもない」南方が自発的に「方丈記」英訳に取り組んだ背景についても松居は論じているが、この点にはいま立ち入らない。

²³ 前出の岩上編『F.V.ディキンズ書簡英文翻刻・邦訳集 アーネスト・サトウ、南方熊楠（他）宛』の編者「解説」は、同書所収の1904年11月25日付け南方宛て書簡でディキンズが、翻訳は「ほとんどやり直してした」（I did it all over again）と伝えていたことを指摘している（同じ書簡からは、南方への謝辞を記すことが、南方からの提案であったことも窺われる）。南方が送った英語訳そのものは（南方からの書簡も）今日まで発見されていないが、南方熊楠邸資料のなかにその下書きと思われる草稿が現存している（[原稿 0025]）。これと、公刊された英語訳を比較して、小泉博一「熊楠の英訳『方丈記』の草稿」（『熊楠研究』5号、2002年）および前出の松居「南

的に書き換えた (entirely remade by myself)」²⁴と明記した。当初 (1903年4月7日の時点で) デイキンズが南方に「宇津保物語」英訳を打診した際には「こちらで編集し、あなたのものとして本に いれましょう (I would revise it and add it as yours)」と記していたことと照らし合わせれば、1907年の単行本『方丈記』がデイキンズ単独の業績のかたちになったことは、事後に彼が態度を翻したともいえる。しかしながら、こうした事態が進行したのは、『古代中世日本文学』のためにデイキンズが諸文献の入手や、収録する作品の日本語についての無数の質問を南方へ求めていた間のことだった。デイキンズにとって同書の全体はあきらかに彼個人の業績であり、南方と共同で学術活動をしているという認識を持っていたとは、考えにくい。

『古代中世日本文学』の仕事を進めながら、「方丈記」雑誌発表を準備していたさなかの1904年10月9日に、アーネスト・サトウ (幕末の日本にともに滞在して以来の旧知だった) に宛てた書簡のなかでデイキンズは、南方の名前を挙げてこう記している。

私の万葉集もようやく清書の段階で、あとはただ日本からの研究が届くのを待つばかりです。

[...]南方熊楠という坊主でじつにすばらしい男が私のために調べてくれています——彼は西洋・東洋を問わず、たいへんな物知りで、[...] やつとの思いで国に帰らせましたので、もう二度と現れてほしくありません。しかし、今はできるものなら、彼を雇ってここで仕事をさせたいと思うほどです——仕事が早く正確で熱心です²⁵。

イギリス人日本研究者同士の間での書簡に見えるこの文章は、南方の学者的能力そのものに対する高い評価とともに、デイキンズにとって南方が「インフォーマント」、つまり「(西洋人) 研究者」の業績のために必須ないし有用な情報の提供者であり、自分と対等に競合する立場ではない現地人という位置づけだったことを、如実に物語っている。最終的に単行本『方丈記』を彼個人の著作としたことは、デイキンズの立場からは、『古代中世日本文学』自体と整合する、当初からの一貫した考え方だったのだろう。

なお、デイキンズの「方丈記」単行本を刊行した出版者アダム・ゴワンス (Adam Gowans) に対してデイキンズは、南方のことを高く評価する紹介をしたと思われ、1909年にはこのゴワンスから直接南方に、曲亭馬琴の小説の英語翻訳を打診する書簡が届いた²⁶。これはいわば、デイキンズとの縁が、南方がイギリスで刊行業績をあげる機会に結びついたものである。また、1910年8月11日の南

方熊楠と『方丈記』(『文学』2012年3・4月号)は、南方の訳が「下訳」的なものだったという評価を示している。

²⁴ 全集10巻英語の部 p 10、日本語訳は前出の松居「南方熊楠と『方丈記』」での引用による。

²⁵ 岩上ら編『F.V.デイキンズ書簡英文翻刻・邦訳集 アーネスト・サトウ、南方熊楠(他)宛』p 108の岩上訳による。

²⁶ 1909年2月15日の南方日記の受信欄に「馬琴の小説翻訳の事聞合、デイキンズ氏より予の名聞しと。一月七日出、此状の返事は三月二十日出す也」とある。この件については、松居竜五「南方熊楠ゴワンス社宛て書簡下書きについて」を参照。結論としては、南方の翻訳刊行は実現しなかった。

方宛て書簡でディキンズは、結局彼の最後の訳業となった『飛騨匠物語』（石川雅望作、葛飾北斎画、1808年刊、この英語訳も、ゴワンス社から刊行された）の善本探索を依頼するなど、情報提供者としての南方との関係を、ディキンズはこの後も維持している。それにも関わらず、単行本『方丈記』（*Ho-jo-ki, Notes from a Ten Feet Square Hut, a Famous Japanese Classic*, Gowans and Grey, 1907, Gowans's International Library No 15）をゴワンス社から刊行した事実については、ディキンズから南方に伝えられたことはなかったらしい。南方の日記には、1909年9月3日に英パーミンガムの書店 Hitchman へ9シリングを送金し、11月14日に「受取書一（及予及ディキンズの方丈記一冊。ゴワンス及グレイより万国名著文庫第十五編として出せるもの）」が届いたことが、論評抜きで淡々と記録されている。

6. むすび

変形菌研究におけるリスターとの関係と、日本文学研究におけるディキンズとの関係は、南方が、イギリス人研究者に対して情報提供者として協力をしたと表現すべきものである。南方熊楠の学術活動には、(20世紀の人類学が構造的に依拠した) インフォーマントになぞらえるべきものが確かにあった。

ここで立てるべき問いには、二つの面があろう。ひとつは、個人の名前のもとに（したがって、個人の責任において）著作・論文・研究ノートと、個人間の情報提供を通じて、自分の学術活動が別人の手により公刊された場合との違いを、自らも著述者であった南方がどう認識していたか、であり、もうひとつは、個人の業績として公刊した著述・論文・研究ノートも、別の領域（文献研究や聞き取り採集に基づく民俗研究など）でそれなりに多数あった南方は、「研究者」ではないのか、という疑問である。

後者からいえば、民俗学系雑誌にさかんに寄稿した民俗学者であり、また「今昔物語集」などの源泉研究や比較説話研究を試みた研究者でもあった南方が、生物学については自ら貢献者とは（あまり）ならなかったことは、事実である。南方の訃報を承けて、5年年長だった牧野富太郎が記した文章「南方熊楠翁の事ども」（『文藝春秋』1942年2月号）が、きわめて冷淡に「南方君は往々新聞などでは世界の植物学界に巨大な足跡を印した大植物学者だと書かれまた世人の多くもそう信じているようだが、実は同君は大なる文学者でこそあったが決して大なる植物学者では無かった」と断じたことがよく知られている。確かに南方は、狭義の生物研究への貢献という意味では、文献研究の場合とは異なり、自分自身で学界の手続きを踏んで自分の知見を公刊しはしなかった。他方比較説話学など文献研究の領域では、南方自身が多数の研究ノートを英語と日本語で公刊しており、その中には研究史の中で彼の先取権をみとめてよい種類の著述も、存在している²⁷。

だが、かなりな量の生物採集を長期間継続し、個々の研究者と私的な通信を続けた南方が、その成

²⁷ たとえば拙稿「南方熊楠のマンドラゴラ研究—その研究史上の位置—」（『熊楠研究』8号、2006年）では、マンドラゴラ説話の研究史の中で南方の英文による研究ノートが占める位置の検証を試みた。

果を別の研究者に委ねたことをもって、南方は「植物学者では無かった」と断じてよいものだろうか。

変形菌研究のリスターらにとっても、また日本文学研究のディキンズにとっても、南方はインフォーマントであり、彼からの情報は自分たちの業績すなわち学界への貢献にとって大きな価値があった。そして、両者とも、南方との直接の通信では、南方の貢献を尊重する姿勢を（書簡で）示し、いわば南方に気持ちよく情報貢献を継続させていた。

南方自身は、そのような間接的なかたちでの学界への貢献にも、研究者としての彼独自の誇りをもっていただように思われる。

生物研究において、南方のフィールドワーク＝屋外での野性生物の観察・採集は、彼なりのやりかたで生涯続いた。変形菌については、1929年（南方62歳）の昭和天皇御進講の頃までで採集活動を終えていったようだが、菌（キノコ）類は、最晩年の1941年まで採集と観察記図を続けている（適切な研究者へ情報提供をし、それが業績化されるには至らなかったが）。そして彼の日本産変形菌採集は、リスターらの手によって10におよぶ新種の記載報告をもたらした（そのうち一種が、リスターによって南方に献名されたミナカテルラ・ロンギフィラ *Minakatella longifira* である）、また日本に分布している変形菌種の確認種数を、1906年の20種から、1927年の196種まで増加させた²⁸。これは南方単独ではないが、彼と協力者による標本採集と丹念な観察による同定の努力の成果である。これらは、南方の誇りとするところであった。とくに後者の、日本産変形菌フローラの網羅的な把握は、南方が日本語で唯一発表を行った生物学論考の主題であり、彼自身ははっきりと、新種の発見よりもこちらを重要視していた²⁹。

前出の回顧文で牧野は、南方が「吾等分類学者がするように、遠近の諸州を旅行して博〔ひろ〕く植物を採集し普〔あまね〕くその標本を蒐〔あつ〕め、そしてその各種についていちいち研鑽検討した事はない」と断じ、そのことを以て「決して大なる植物学者では無かった」ことの論拠とした。大採集家牧野富太郎に比較した場合、採集活動の足跡の狭いことについて反論の余地はないが、「普くその標本を蒐め、そしてその各種についていちいち研鑽検討」という努力を、限られた分類群について南方は（協力者複数の手を借りて）20年にわたり継続し、彼にとっては意義のある取りまとめ（日本産変形菌の目録）にまでこぎ着けている。

そしておそらく、「今昔物語集」に収められた各説話を、東西文明圏を横断する比較説話研究の視点から比較し、そのために諸言語の説話を渉猟するといった、文献研究の領域で彼が生涯続けた営みもまた、南方の知的関心の観点からは、同じ好奇心を別の領域に向けたという関係のものだったように思われる。

説話蒐集や、比較民俗研究の領域においては、個々の片々たる観察を小さな研究ノートとして投稿し、公刊する場に、南方は行き会うことが出来た（英語圏の *Notes and Queries* 誌、日本語では、彼

²⁸ 前出「本邦産粘菌類目録」『植物学雑誌』（1908.9）、「現今本邦に産すと知れた粘菌種の目録」『植物学雑誌』（1927.2）、ともに全集5巻所収。

²⁹ 拙稿「新種ぎらいの分類学―南方熊楠の変形菌研究」『熊楠研究』6号、2004年）を参照されたい。

の活動とともに成長していった、『郷土研究』誌をはじめとする初期の民俗学雑誌)。その結果、個々の南方の著作は、自分ひとりの小さな関心にとって意味をもつ、小さな発見を書き連ねた、瑣末な情報の蓄積という印象のものが多い。それらは、通読しても見通しよく全体を見渡すことが出来ない、細部の豊かさに満ちた世界をなしているという点で、南方が観察・蒐集を続けた対象そのものにも似ている。そうした蒐集活動を、書物の世界では諸文化圏の説話群、市井の生活者たちの世界にあっては口伝の伝承知、また野性の生態系にあっては、さまざま隠花植物を対象として、継続した—それが、南方熊楠の日々の研究活動であった。

南方の知的好奇心にとっては、対象が野外の生物であるか、書物のなかの文字で記された説話であるか、庶民の話し言葉のなかに保存された知恵であるかといった表層部分は、大きな違いではなかったのではないだろうか。そして、日々の些細な発見を、同好の士と共有する手段があった領域では、彼は公刊「業績」を自ら積み上げることが出来、そうでない場合、関心を共有する「研究者」に、惜しみなく情報を提供したのだろう。単なる採集者なのか、学界に向かって発言する研究者なのか、という線引きや分類の意識が、南方に希薄であることは、奇異といえば奇異だが、彼の学問観の興味深さともいえる。ある領域の仕事では「研究者」であり、別のある領域ではそうではないといった、後世の観点から立てた区別は、南方自身の求めた「知」のあり方とは、およそ縁遠い南方熊楠像であるかも知れない。